



## 和歌山を飛び出し世界との接点となる

norm には県外からの来場者が多く、来館をきっかけに初めて和歌山を訪れる人も少なくありません。ギャラリーが身近ではない地域だからこそ、作家や作品、作り手の存在に触れる入口になりたいと坂上さんは語ります。2023 年からは札幌・山梨・岡山で「norm 展」として POPUP を開催し、地域ごとに異なる文化や背景の中で作品をどう表現するかという新しい挑戦も始めました。さらに 2026 年にはベルギーと台湾での海外出店を予定しています。言葉や生活習慣の異なる地へ活動を広げることで、和歌山から外へ、外で出会ったものをまた和歌山へ——。人や思いが往来する流れを norm から生み出したいと、坂上さんは未来を見据えています。



### norm 坂上宜義さん

1979 年和歌山県有田市生まれ。家業の家具店を引き継ぎ、家具や生活雑貨の仕入れや販売など担当。作家作品やアートとの出会いを機に、量産品にはない固有性や、作り手の背景を宿す表現に強く惹かれるようになり、その関心の深化から、2017 年に和歌山市にギャラリー「norm」をオープン。

### 編集メンバーおすすめの一冊



### 学芸員しか知らない美術館が楽しくなる話

著者：ちいさな美術館の学芸員 / 出版社：産業編集センター

黒子的な存在であり、謎の多い専門職・学芸員。その仕事の内側を、現役の学芸員の視点からわかりやすい文章で描いています。展覧会ができあがるまでの知られざる苦労や、美術館運営を支える人々の職人技など、舞台裏のエピソードが豊富に紹介されています。読んでいくうちに、アートや美術館という場所が自然と身近に感じられてきます。そして、次の週末に行く美術館を検索してしまう、そんな余韻を残してくれる一冊です。

### 編集後記

Vol.22 を迎えた and the ですが、今回取材した norm は「2」と深い縁があるそうです。偶然にも“2”が並ぶ号での掲載となり、坂上さんもまた一つの不思議な縁を感じたとお話しくださいました。個人的には、これまでアートや美術館といった場所に、どこか心理的な距離を感じていました。しかし今回、norm で取材をさせていただいたことでそうした考えが少し変わりました。空間に溶け込むように作品が並び、日常の延長線上にアートが存在している。そんな印象を受けたからです。なくてはならないものではないけれど、あることで暮らしが豊かになるもの。それがアートなのだと感じました。

地方都市では文化的体験が限られ、「文化格差」が生じがちな中で、和歌山を拠点に多様な作り手との接点を生み出している norm は、大正時代から残る旧西本組本社ビルと同じく、確かな価値を持つ場所だと実感しました。今年はさらに国境を越えて、世界での norm 展を開催される坂上さんが、世界から何を持って帰ってきて、これからこの和歌山でどんな空間演出をされるのかさらに楽しみになりました。



「和 the」は和歌山市民図書館が発行する、まちの技・巧・匠を発信するフリーペーパーです。図書館がまちと接点をもち、まちが誇る文化や技術を発信しています。まだ知らない、ここ和歌山の魅力にぜひ触れてみてください。

## 和歌山市民図書館

WAKAYAMA CIVIC LIBRARY

〒640-8202 和歌山県和歌山市屏風丁 17 番地  
開館時間 / 9:00~21:00 TEL / 073-432-0010

和 the バックナンバーは、図書館 HP より  
ご覧いただけます



ホームページ



Instagram



facebook



# 22

2026.4.1 発行  
TAKE FREE



# 長い歴史の中で 作り手の想いを 渡す

取材協力：norm 坂上宜義さん

## 和歌山市民図書館

WAKAYAMA CIVIC LIBRARY

# 想いを居ける 空間をつくる ワザ

和歌山が誇るワザ(技・巧・匠)を発信する、和歌山市民図書館のフリーペーパー『和 the』。Vol.22 のテーマは「長い歴史の中で作り手の想いを渡す」です。今回は、国の登録有形文化財に指定されている旧西本組本社ビルの一階でギャラリー「norm」を運営される坂上宜義さんに取材しました。「人と人が出会い、人とものが交わる景色を。」というコンセプトのもと 2017 年に norm の運営を開始しました。和歌山を拠点に様々な文化の発信を行い、地域に作り手との接点をつくり続ける坂上さんの「ワザ」に迫ります。

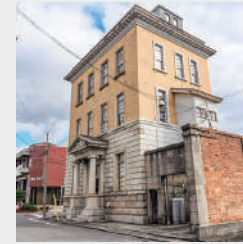


## 家具屋からの転身

坂上さんは、父親が営んでいた家業を引き継ぎ、家具や生活雑貨を扱う店舗でキャリアをスタートしました。商品の選定を重ねる中で作家作品と出会い、量産品とは異なる魅力に強く惹かれていったといいます。もともとヨーロッパの古い建築や骨董に関心があり、作り手の背景や物語が感じられる作品を集めていた坂上さん。そうした品々が持つ魅力を最大限に引き出し、次の持ち主へと手渡す場所を作りたいという思いで norm を開業しました。

## 展示会場としての空間価値

norm が入る旧西本組本社ビルは、開業前は内装も現在とはまったく異なる姿だったといいます。展示空間へと生まれ変わらせるために、壁や床に施されていた塗装をはがすところから作業が始まりました。こうして本来の姿に近づいた空間は、洗練された雰囲気と温かみが共存していて、どんな展示であっても自然に馴染み、作家それぞれの世界観に寄り添う柔軟さを備えています。長い年月を通して時代の移り変わりを見守ってきた壁は、確かな存在感を放ちながらも決して自己主張しすぎることはありません。その控えめな個性が、むしろ展示作品ひとつひとつの表情を際立たせているのだそうです。



## 旧西本組本社ビルとは

和歌山市民図書館から徒歩 10 分の場所にある、国の有形文化財に登録された近代建築です。和歌山市内が空襲で大きな被害を受けた中、このビルは致命的な損傷を免れて残りました。その後、長い年月をかけて修復を重ねながら大切に守られ、今の姿へと受け継がれています。



## 余白を生み出す

norm の展示作品にはキャプションが添えられていません。空間をつくる時は物理的な余白だけでなく、見る人の心にもどう余白を生み出せるかを意識しています。言葉で過度に説明したり、作品の意味を固定したりせず、鑑賞したときに芽生えた感覚のまま見ることができる空間を目指しています。



## 循環のひとつになる

坂上さんが作品を選ぶ際に大切にしているのは、作り手がまとう空気や雰囲気だといいます。そうした想いから、人柄を感じられる作品を丁寧に迎え入れてきました。想いを込めて生み出された作品が作家の手を離れ、だれかの手に受け継がれていく。その循環があるからこそ、作家は次の作品をつくり続けることができる。「norm が存在することで、この循環を生むことができた」そう実感できる瞬間をできるだけ作れるように空間演出を行います。



## 非日常の中の日常であり続ける

坂上さんは norm を「美術館とギャラリーのあいだ」にあるような空間にしたいと語ります。美術館のように作品と深く向き合う体験価値がありながら、そこで気に入った作品を日々の暮らしに取り入れられる。この両面の良さを感じられる場所でありたいといいます。だからこそ、norm に並ぶ作品はどれも生活にそっと寄り添うものばかりです。手に取って家へ持ち帰ることで、日常の風景になり、その作品に出会ったときの感情や記憶が、暮らしの中に静かに溶け込んでいく。坂上さんは、そんな豊かな体験を生み出したいと願いながら作品を選定し、空間をつくり続けています。